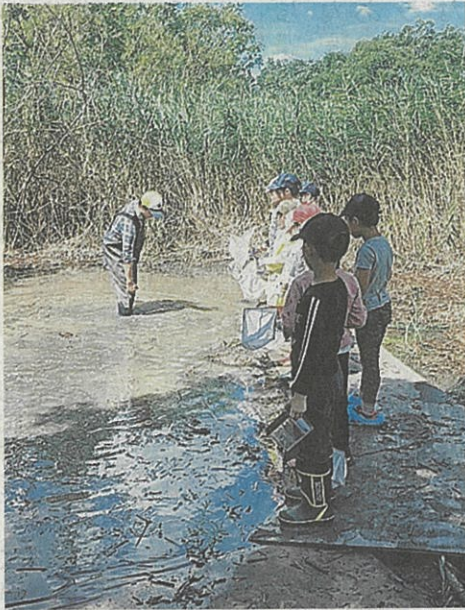
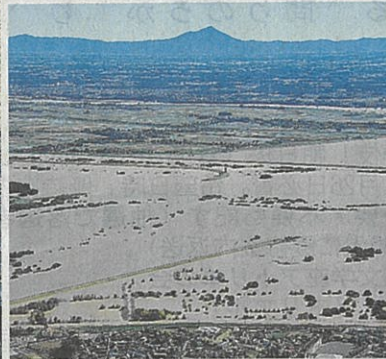




佐々木 英輔



遊水地に掘った池での観察会。増水の前後での生き物の変化も調べている＝さいたま市、諏訪さん提供



台風19号で水面が広がった渡良瀬遊水地＝10月13日、本社ヘリから

遊水地 人の手で高める価値

背よりも高く薄茶色に染まった木々の葉が、増水時の水量を物語る。駐車場や遊歩道には乾いた泥が積もったままになっていた。

栃木、群馬、茨城、埼玉の4県にまたがる渡良瀬遊水地。10月の台風19号では33平方キロに及ぶ敷地に水面が広がった。ためた水は東京ドーム130杯分に当たる1億6千万リットル。過去最大という。台風後の規制は徐々に解かれ、日常に戻りつつある。

足尾鉍毒事件と強制廃村という負の歴史を背負うこの場所は、自然観察や釣り、スポーツを楽しめる憩いの場になった。貯水池の背後にはヨシ原が広がり、野鳥をはじめ様々な生き物のすみかになっている。

遊水地は、増水時に川の水を受け止め、下流の洪水を防ぐ機能を持つ。ラグビー・ワールドカップの台風直後の試合が、横浜市の遊水地上の競技場で開かれたこともあり、そのありがたみが改めて注目された。

全国にどれだけあるだろうか。東邦大学の大学院生諏訪夢人さん(26)らの調査では少なくとも147カ所(調節池含む)。埼玉県が多かった。

調査は、遊水地の活用を探る研究の一環だ。運動場や公園があるものも多いが、「地域の人が参加し、より積極的に価値を引き出す仕組みを考えたい」と諏訪さんは言う。

幼いころ、さいたま市の自宅近くの遊水地で遊んだのが原点だ。束ねたヨシに段ボールをかぶせて「秘密基地」をつくり、魚を釣った。しかし年月とともに草木が茂り、人も遠のいたように感じていた。今は地元自治会の協力を得て子どもたちと池を掘り、生き物を観察。住民の意識も合わせて調べている。

実は、こうして人の手が適度に入ることは遊水地の生態系にとっても重要なのだという。繰り返し冠水する氾濫原の環境は農地や堤防の整備、都市化で失われてきた。遊水地は残る貴重な場所だ。ただ、流路が変わるような自然の激しい変化は起きにくい。植生がまばらな場所ですさを得る鳥、掘り返されて芽吹く水草……。草刈りや火入れ、池の掘削や耕作といった「攪乱」が多様な種を根付かせる。

西広淳・国立環境研究所主任研究員(東邦大客員教授)は「教育や健康、福祉も含めた地域活性化の拠点にもなり得る」と言う。静岡市の麻機遊水地では、自然体験のイベントや障害者による米づくりなど地域が一体になった取り組みが広がる。可能性を秘めた場所は各地にある。治水だけの土地にしておくのはもったいない。

(編集委員)

◆「朝日新聞環境取材チーム」のツイッター (@asahi_kankyō) でエコの話題をつぶやき中